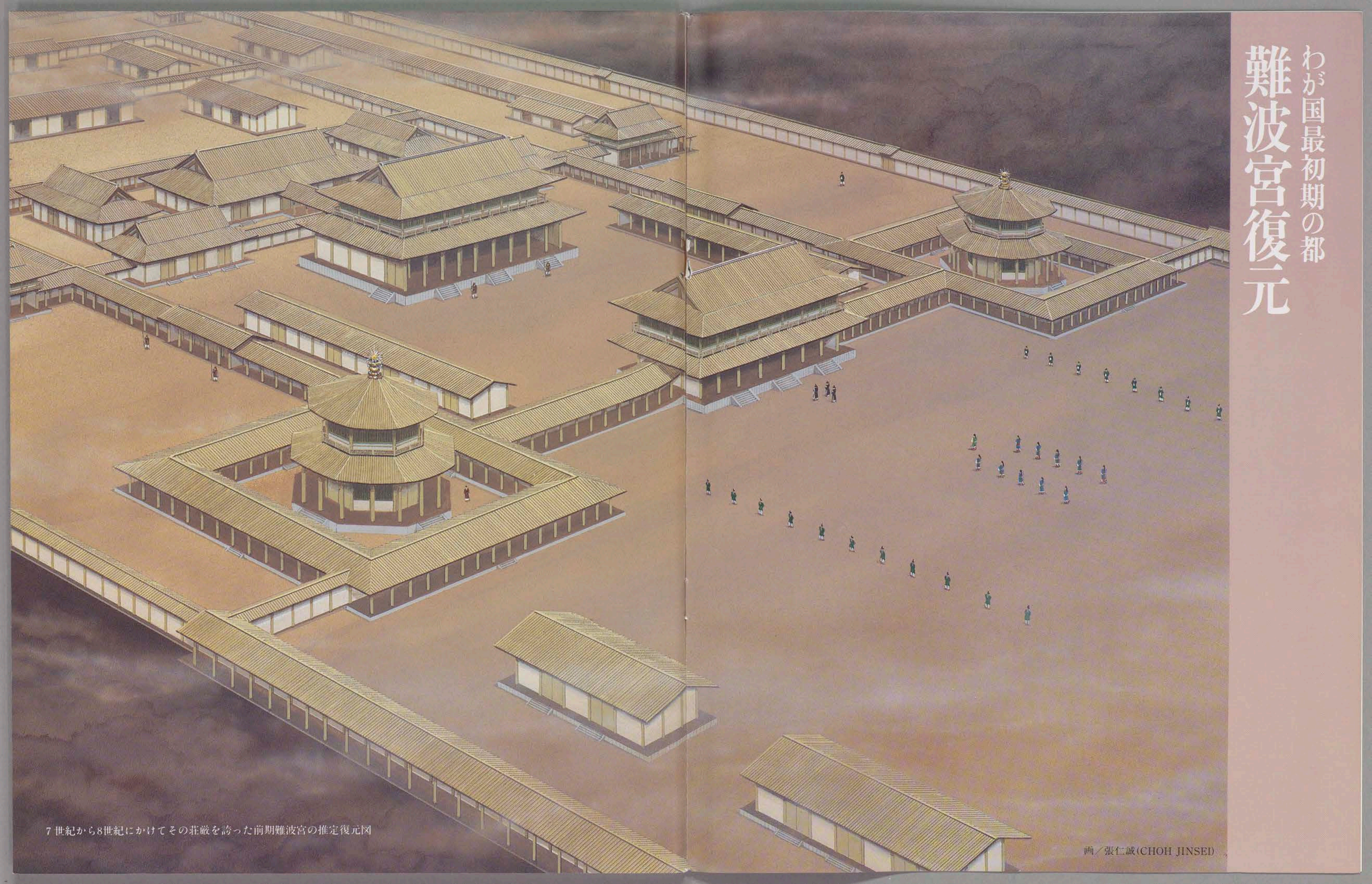
# わが国最初期の都
# 難波宮復元



7世紀から8世紀にかけてその荘厳を誇った前期難波宮の推定復元図

画／張仁誠(CHOH JINSEI)

# よみがえる都市の源流
# 難波宮（後期）の復元

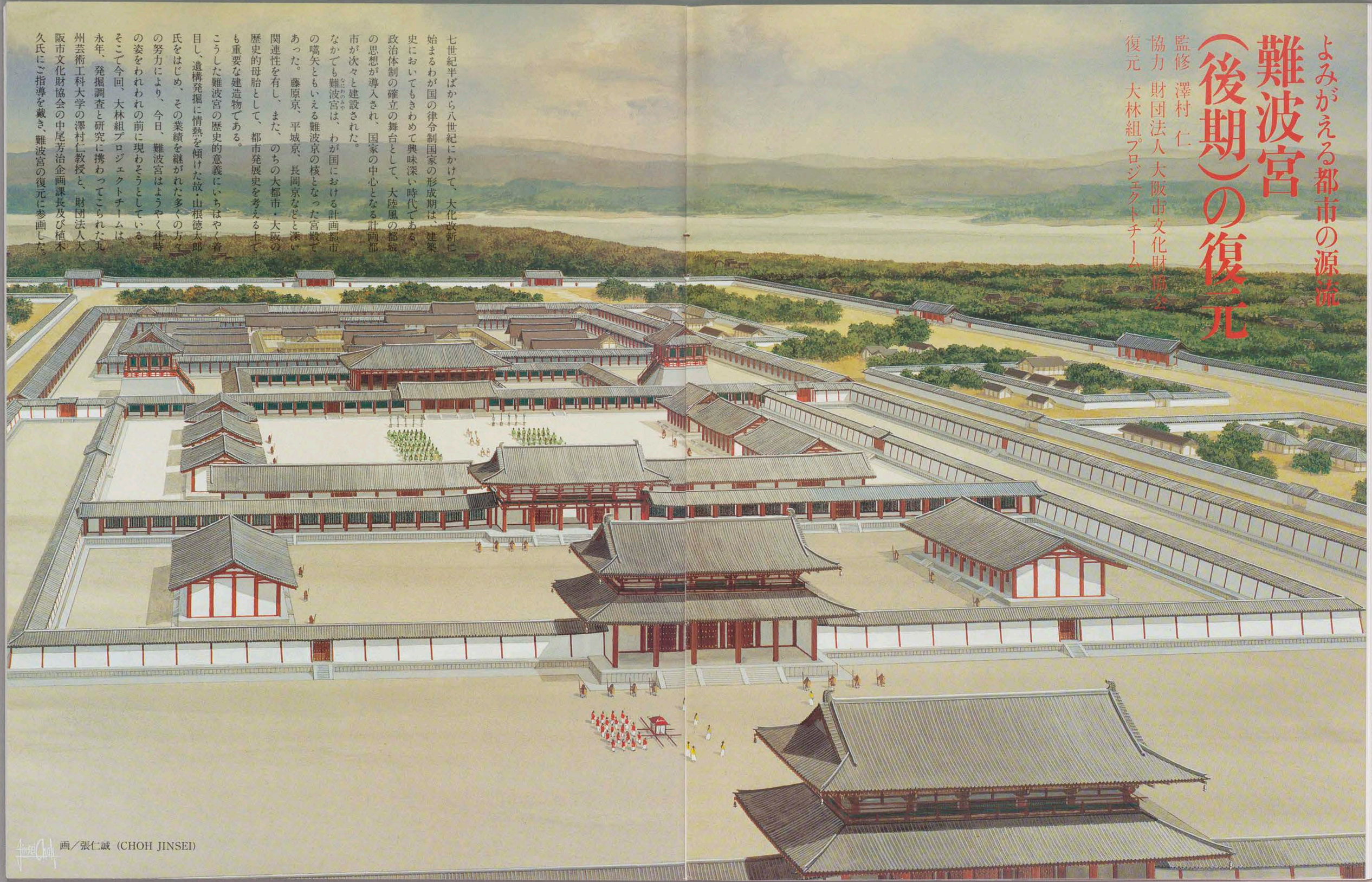
監修　澤村　仁
協力　財団法人 大阪市文化財協会
復元　大林組プロジェクトチーム

七世紀半ばから八世紀にかけて、大化改新に始まるわが国の律令制国家の形成期は、建築史においてもきわめて興味深い時代である。政治体制の確立の舞台として、大陸風の都城の思想が導入され、国家の中心となる計画都市が次々と建設された。

なかでも難波宮（なにわのみや）は、わが国における計画都市の嚆矢ともいえる難波京の核となった宮殿であった。藤原京、平城京、長岡京などと深い関連性を有し、また、のちの大都市・大阪の歴史的母胎として、都市発展史を考える上でも重要な建造物である。

こうした難波宮の歴史的意義にいちはやく着目し、遺構発掘に情熱を傾けた故・山根徳太郎氏をはじめ、その業績を継がれた多くの方々の努力により、今日、難波宮はようやく往時の姿をわれわれの前に現わそうとしている。

そこで今回、大林組プロジェクトチームは、永年、発掘調査と研究に携わってこられた九州芸術工科大学の澤村仁教授と、財団法人大阪市文化財協会の中尾芳治企画課長及び植木久氏にご指導を戴き、難波宮の復元に参画した。



画／張仁誠（CHOH JINSEI）

# 一、難波宮と古代都市・難波

わが国の古代都市といえば、すぐに飛鳥や奈良、京都が連想される。その反面、難波（現在の大阪）の地が、日本でもっとも初期の都市であったことは意外に知られていない。地元の大阪ですら、大阪の歴史は「太閤さんの大坂城に始まる」と思っている人が多いのである。まして大阪が、難波と呼ばれた古代には日本の首都であったことは、一般にはあまり認識されていない。

では古代の難波とは、どんな地域であったのだろうか。また、そのシンボルであった難波宮とは、何だったのだろうか。

**大化改新と難波長柄豊碕宮**

大化元年（六四五）の六月、中大兄皇子、中臣鎌足らによって、権勢を誇った蘇我本宗家の蝦夷、入鹿の親子が滅ぼされた。いわゆる「大化改新」の始まりである。皇極天皇に代わり皇位に就いた孝徳天皇は、その年の冬、難波に遷都をした。

『日本書紀』には、「冬十二月乙未朔癸卯、天皇都を難波の長柄豊碕に遷したまふ。老人ら相謂りて曰く、春より夏に至り、鼠の難波に向きしは、遷都の兆なり」とある。

永年にわたり王権の拠点であった飛鳥地方を離れ、難波に都を遷すという画期的な事業が行なわれたのである。その新しい都が、難波長柄豊碕宮であった。

遷都の理由については諸説があるが、一般的には、外交と内政の両面から推察されている。海外に目を向けると、当時、大陸では唐と高句麗が、また半島では百済と新羅との一触即発の不穏な関係が続いていた。国際的な政情不安にいち早く対処するには、内陸部の飛鳥より、海の玄関口であった難波は最適の地といえた。一方、国内には、蘇我氏につながる旧勢力が飛鳥を中心とした内陸地方にまだ残っており、人心を一新して早く新体制を確立するには、遷都という方法が有効と考えられたであろう。

と同時に、都市史という視点からみると、難波は、中大兄皇子を中心とした新興勢力にとって、きわめて魅力的な地であったといえる。隋・唐からの帰朝僧や留学生をブレーンとした中央集権型の新しい政治体大陸風の制度を導入した中央集権型の新しい政治体制の確立をめざしていた。それは政治、経済、文化などのあらゆる面における、もっとも革新的な事業であったといえるだろう。

その舞台に選ばれた当時の難波は、難波津という重要な港を有した国家的な拠点であった。現代風にいえば、人、物、金、そして情報の四大要素が集約かつ流動する最前線であった。当時の飛鳥と難波との関係は、明治維新期における東京（江戸）と横浜との関係を連想させるものがある。進取の気性に富む人々が、新しい文物や変革の時代の雰囲気を求めて横浜を訪れたように、難波もまた当時の最新感覚を体験するトレンディな街として機能したことであろう。あらゆる新しい文物や情報は、難波津を経て、水路（大和川）で、あるいは陸路（難波大道など）で、飛鳥へと運ばれて行った。その意味では、中大兄皇子と孝徳天皇は、国家の喉元ともいえる難波という都市の性格を、よく認識していたに違いない。

**古代都市・難波の歴史的背景**

難波はいつ頃から、こうした都市としての様相をみせるようになったのだろうか。

都市としての難波の歴史を考えるとき、まず挙げなければならないのは上町台地の存在である。上町台地とは、現在の大阪でいえば、天守閣の聳える大阪城公園付近から四天王寺のある南の方角へと伸びる、長さ約一二キロメートル、幅約二～二・五キロメートルの細長い丘陵である。古代の難波は、この上町台地を中心とした一帯であった。

上町台地は、現在は陸上部にある高台だが、今から五〇〇〇年前の縄文時代には、その西側はもちろん、東側も生駒山麓に至るまでの広大な地域が、一面の海（河内湾）であった。つまり、上町台地はかつて、海の中に突き出した半島だったのである。その河内湾がやがて、淀川と大和川の二大水系の運ぶ泥と水により、淡水の湖となり、さらには沼沢となっていく経緯は、小松左京氏の原稿に詳しい。また、台地の東北端に「森の宮遺跡」と呼ばれる縄文期から歴史時代に至る貴重な複合遺跡があり、そこで発見された貝塚の層を見ると、海から湖へというダイナミックな地勢の変遷過程を知ることができる。

このように上町台地は、海、湖、川などの水系に囲まれた大阪平野にあって、太古の昔から人間が居住できる安定した高台を構成していた。それだけにしばしば、古代史の重要な舞台ともなった。その中でも、難波の都市化を推察する上で注目されるのは、次のような『記』『紀』の伝承である。

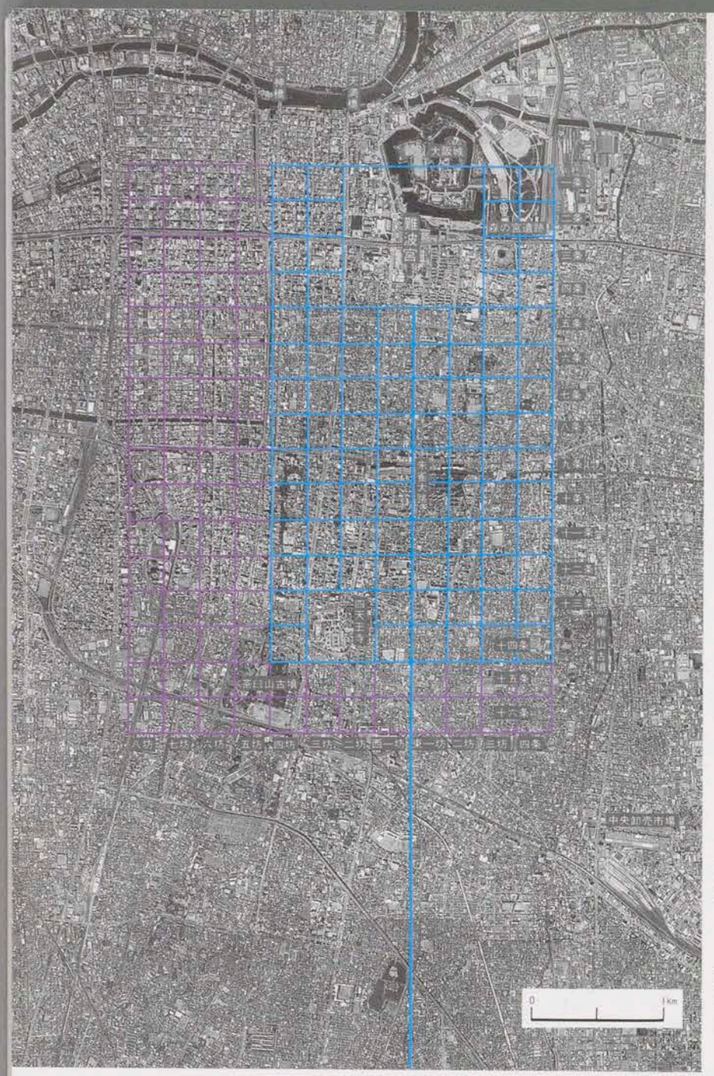
「天皇難波に幸して大隅宮に居ます」（応神朝）

「難波に都つくる。これを高津宮と謂ふ」（仁徳朝）

応神、仁徳という強大な勢力を誇った王権が、いずれも難波に宮殿を構え、仁徳天皇に至っては都を置いたとする伝承は、難波がほかとは異なる特別の地であったことを示唆している。この解釈をめぐり、歴史学の分野では「難波王朝」や「河内王朝」の存在が論争の的となってきた。大隅宮と高津宮については、場所はまだ特定されていないが、どちらも上町台地上にあったといわれている。

一方、交通の要衝としての難波の歴史も古い。水に囲まれた地の利から、台地の沿岸部には榎津、住吉津、難波津などの港が早くから開かれた。とりわけ難波津は、政治的に重要な位置を占め、外交関連の施設が数多く建設された。『記』『紀』によれば、継体朝には外交上の館舎といわれる「難波館」の存在が認められ、安閑朝には「難波屯倉」と呼ばれる諸物資を管理する官営の施設があったことが分かる。また、欽明朝には「難波の祝津宮」が営まれ、外交






澤村仁教授が推定された難波京区域

前期難波京：澤村新説
後期難波京：澤村説（前期難波宮：澤村旧説）

撮影：㈱航測写真センター

上の公的儀式の場とされる「難波大郡」も存在した。さらに推古朝には、隋の使者裴世清の一行を迎えるための新館が、難波の高麗館の上に新設され、使者たちの船は「難波津」に停泊したことなどが記されている。

経済面から見ると、難波津は西国諸国から中央政権に納められる物資の集積港であり、国内流通の拠点でもあった。難波屯倉は、そのための中心的な機能を持つ施設であったといわれる。難波における経済活動がどの程度の規模であったかは不明だが、中央の王権ばかりでなく、有力豪族もまた難波に邸宅を構えていたことからも、その一端を知ることができる。用明朝の物部氏の難波宅、欽明朝の大伴氏の住吉宅、さらには皇極朝の蘇我氏の大津宅などが文献には表われている。蘇我氏の大津（難波津）の邸宅には倉が付いており、豪族たちもこの地に経済活動の基盤の一つを置いていた。とすれば、港を中心とした市井の経済、商業活動もまた、活発に行なわれていたはずである。

難波津を軸として水辺に開けた難波は、古代においてすでに「水都」であり、「商都」でもあったことが想像される。大化改新による難波遷都は、こうした都市的背景を抜きにしては、語ることはできないであろう。

**孝徳朝から天武朝における難波宮**

孝徳天皇の遷都にともなう難波長柄豊碕宮の完成は、白雉三年（六五二）の九月のことであった。その姿を具体的に語る文献はないが、『日本書紀』は「殫く論ずべからず（言葉では表わせないほど立派だ）」と賞賛している。発掘調査による遺構配置などから想像される難波長柄豊碕宮の姿は、日本古来の建築様式に加え、大陸風の都城思想を採用した、従来にみられない画期的な宮殿であった。そこには、大化改新の理想を具体化しようとした中大兄皇子や孝徳天皇たちの、情熱をかいまみることができる。

しかし、難波長柄豊碕宮の首都としての期間は、あまりに短かった。翌年、孝徳天皇と中大兄皇子との意見が対立すると、実権を掌握していた中大兄皇子は皇極上皇を始めとした一族全員を連れて、飛鳥河辺行宮へと引き揚げてしまった。みずからの皇后である間人皇女にまで去られ、一人残された孝徳天皇は、やがて失意のうちにこの宮で崩じている。

難波の地はその後も、斉明朝、天智朝を通じて、外交上の拠点として重視されてきた。たとえば難波津は、遣唐使の発着港として賑い、また半島において百済が唐・新羅の攻撃を受けた折りには、斉明天皇はみずから援軍を率いて難波宮に行幸している。この難波宮は、孝徳朝の難波長柄豊碕宮と同じ宮殿である。

その難波宮が、次に重要な役割を担うのは、天武天皇のときであった。壬申の乱に勝利をおさめ、飛鳥浄御原宮において皇位に就いた天武天皇は、難波の経営にも力を注いだ。『日本書紀』によれば、天武六年（六七七）には難波における港湾管理と外交を担当した「摂津職大夫」を新たに任じ、また天武八年（六七九）には、難波に「羅城（外郭）」を築いたとする記事がみられる。

そして天武一二年（六八三）一二月には、

「凡そ都城、宮室は一處に非ず、必ず両参に造らむ。故れ先ず難波に都せむと欲す」

と詔して、複都制の思想を導入したのである。複都制とは、首都のほかに陪都（副都）を置く形式で、隋や唐に先例がある。天武天皇によるこの詔によって、難波宮は陪都として行政上の重要な都市となり、その整備が急速に進んだ。

ところが、その約二年後の朱鳥元年（六八六）正月、難波宮は致命的な火災に見舞われた。「大蔵省」からの出火によって、「兵庫職」を除く宮室の大半が焼け落ちてしまったのである。さらにその年の九月に天武天皇も崩御され、副都・難波宮の栄華は一場の夢と消えた。孝徳朝の造営から天武朝の焼失まで、ほぼ三五年。その間、難波宮は、改修などの変化は受けたものの、基本的には同じ宮殿として機能してきたことが、発掘調査によって判明している。そこで、両宮を建築的には一つのものと考え、現在は「前期難波宮」と称している。前期難波宮は、上町台地に展開された都市形成史の集成ともいえる都・難波の中心となった宮殿であり、また大化改新の理想を具現化した貴重な建築であった。

**前期難波宮の復元試案**

前期難波宮は、どのような姿をしていたのだろうか。今回の主眼である「後期難波宮」を復元するに際し、比較検討のために前期難波宮の特徴を紹介しておきたい。これは、現在までの発掘資料を基に、財団法人大阪市文化財協会の植木久氏が試みた復元案の概略である（2～3ページのパース）。

◎全体配置

前期難波宮は、上町台地の北端部に近いもっとも標高の高い地域を中心に造営された。宮殿の中枢部は、北に内裏、南に朝集堂院を配し、それらは回廊によって結ばれていた。この構成は、内裏を中心とした天皇の内廷的部分と、朝堂院を中心とした一般行政を掌る部分とが、まだ未分化の段階を示している。藤原宮以降の宮殿では、内裏と朝堂院とが明確に分離されており、この点の比較は都城の発展史を考える上から興味深い。

内裏後殿、内裏前殿、内裏南門（紫門）、朝堂院南門（南中門）などの建物は、南北の中軸線上に並び、そのほかの八角殿院（東・西楼）、朝堂院（朝庭）の各堂などは左右対称に配され、全体に整然とした配置となっている。

◎建物

すべての建物が掘立柱形式であり、屋根瓦は用いていない。また基準尺は一尺＝二九二ミリメートルであり、いわゆる天平尺（一尺＝二九八ミリメートル）よりも短い尺度が採用されている。さらに、建物の遺構に広く火災にあった痕跡がみられる。これらのことから、天武朝の朱鳥元年の火災時以前の建築であることは明確だが、さらにそのほかの発掘資料から、前期難波宮は孝徳朝に創建されたものと考えられる。

遺構中最大の建物は内裏前殿である。柱間九間（三六・八メートル）×五間（一九メートル）で、梁間三間の身舎の四面に庇を持つ建物であったと推察される。その身舎の柱痕跡は、直径七三センチメートルに及ぶ巨大なものである。内裏前殿は、のちの朝堂院正殿（大極殿）と内裏正殿の役割の両方を兼ねたものと思われる。これも藤原宮以降に分化していく。

内裏前殿の南にある紫門は、七間（三二・七メートル）×二間（一二・三メートル）の平面を持つ、総柱の重層門である。これほどの巨大な門は、その後の宮都にも見当たらない。

［左］復元された鴟尾模型、［右］発掘された鴟尾片（写真／大阪市史編纂所）

その内裏南門の両側に配置された八角殿院（東楼、西楼）は、前期難波宮におけるもっとも特徴的な建物である。一辺約四一メートルの方形の複廊の中央に、三重の柱を持つ八角形の楼閣が建っていたと思われる。その役割については、鐘楼、あるいは鼓楼と考えられるが、外観的には中心にある内裏前殿を荘厳化する飾り的な意味もあったであろう。八角形の平面を持つ建築物は、寺院にはみられるが、宮殿では前期難波宮をおいてほかには例がない。また建設時期は、七世紀半ばといわれる京都府樫原廃寺の八角塔跡と並ぶ日本最古のものであり、その平面規模はわが国最大とされる興福寺南円堂をもしのぐ壮大なものである。

その南側に広がる朝堂院（最近、東第一堂を検出）は、現在発見されているだけでも一四堂の朝堂を持つ大規模なものである。藤原宮以降の朝堂院は、一二堂が正式とされており、前期難波宮はその前段階的な形式であったとも考えられる。また、前期難波宮の朝堂院の東西幅（二三三・四メートル）は、藤原宮の朝堂院の東西幅（二三〇・三メートル）にほぼ等しいといった類似点もある。

◎その他

前期難波宮については、今回は紙面の関係もあり、その特徴的な一部を列記するに留めた。宮殿の形態は、その時代の政治制度の表現であるとも理解できる。それだけに、古代史において重要性が指摘されるのも当然である。前期難波宮の場合、その創建が孝徳朝であるかどうかをめぐる論争が尽きない。大化改新の解釈とも関わるだけに、今後も古代史の大きなテーマとなるであろう。

また、日本の都城制は、中国の影響を受けているのは明確だが、それが隋・唐の長安城であるか、それ以前の南北朝時代の影響であるかをめぐり、日中の学者の間で意見が分かれている。前期難波宮の形態は、文中にも少し指摘したように、それ以降の宮殿とは異なる点がかなり多い。八角殿院や朝堂院（朝庭）の形式がどのような意味を持っているのか、日本の都城の源流を探る上で、前期難波宮の存在意義は大きい。

**「難波京」とその成立時期**

一方、都市史の見地からは、宮を中心とした計画都市「難波京」の存在をめぐっての関心が高い。

難波京については、大化改新の詔に、次のような一文がある。

「其の二に曰く、初めて京師を修め、畿内の国司、郡司、関塞、斥候、防人、駅馬、傳馬を置く、及び鈴契を造り、山河を定めよ。凡そ京には坊毎に長一人を置き、四坊に令一人を置き、戸口を按へ儉め、奸非を督し察ることを掌れ（後略）」

この詔によれば、孝徳天皇や中大兄皇子たちのめざしたものは、中央集権国家にふさわしい整然とした大陸風の計画都市であったといえる。ただし、この詔の内容は、のちの大宝令による潤色であるという説もあり、孝徳朝における難波京の存在はまだ明確にはなっていない。

難波京の痕跡をうかがい知るものとしては、難波宮の中軸線の延長上に、朱雀大路とも考えられる道がみられ、さらに南にある四天王寺の東側では方格の地割の跡が指摘されている。その方格の一坊は、藤原京の一坊と同じ大きさでもある。また、難波宮の西側にあたる船場島之内でも、難波京のものといわれる方格の地割跡がみつかっている。これらの痕跡や文献をもとに、澤村仁教授を始めとして難波京の復元が試みられており、上町台地における難波京の姿とスケールを想像することができる（17ページ図参照）。

ただ、難波京の成立時期をめぐっては諸説があり、ここに紹介する余裕はないが、もし難波京が孝徳朝、あるいは天武朝に造営されたものであれば、日本最古の計画都市ということになる。

## 二、後期難波宮と難波京の盛衰

**聖武天皇と難波宮の再建**

天武天皇の亡き後、その意志を継いだ持統天皇は、やがて大和平野の一角に本格的な都城計画を推進した。これが持統八年（六九四）に遷都が行なわれた「藤原京」である。藤原京は、持統、文武、元明の三代一六年の短い首都であったが、前期難波宮としばしば比較されるように、わが国の初期宮都として重要な都市である。

重圏文軒瓦（写真／大阪市教育委員会）

さらに元明天皇の和銅三年（七一〇）には、藤原京を凌駕する規模の「平城京」が奈良に造営された。

この間、難波宮はどうなっていたのだろうか。朱鳥元年の失火により宮室を全焼したが、文献によれば、その後も持統上皇、文武、元正天皇の時代に、それぞれ難波宮行幸があったとされる。しかし、その当時の難波宮が、前期難波宮やのちの難波宮とどう関係するのかは不明である。あるいは難波の地に、仮宮として建設されたものであろうか。

難波の地において、再び本格的な宮殿の造営が開始されたのは、聖武天皇のときであった。『続日本紀』の神亀三年（七二六）十月の条に「式部卿従三位藤原朝臣宇合を以て、知造難波宮事となす」とある。藤原宇合は、聖武天皇や光明皇后と縁戚関係にある藤原家の三男であり、また遣唐使として大陸に渡った経験もある。それだけに難波宮の再建は、藤原宇合を始めとした新しいブレーンによる意欲的な都市計画であったことが想像される。

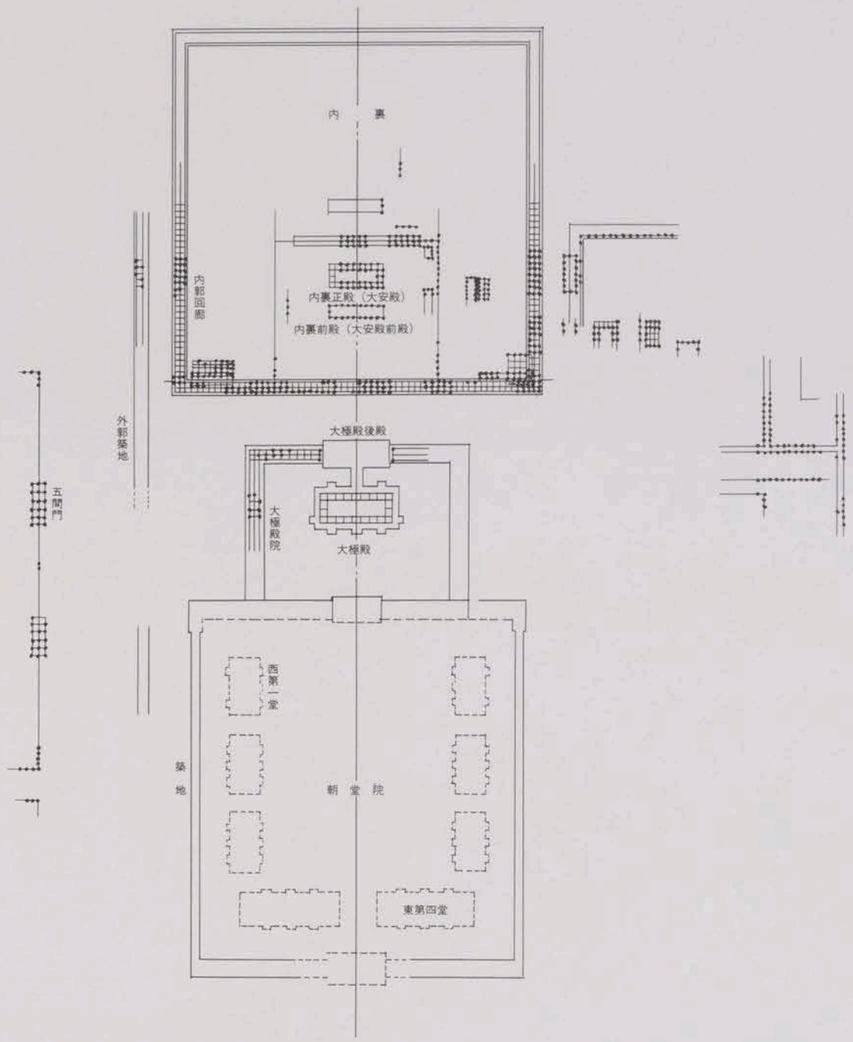
その翌年、聖武天皇は、難波宮の造営工事に携わる雇民の課役と房の雑徭を免じている。宮都の造営が民衆にとっては大きな負担であることから、その軽減を図る措置であった。また天平四年（七三二）には、藤原宇合以下、仕丁に至るまで、物を賜ったとする記事が『続日本紀』にみられる。この時期に、難波宮の工事に一区切りがついたものであろう。『万葉集』には、「昔こそ難波田舎と言はれけめ、今は京引き都びにけり」という宇合の歌がある。天武朝の火災以後、おそらくは荒廃していたであろう難波宮がようやく立派になったと、自負した歌であったかもしれない。

難波宮の造営は、さらに石川朝臣枚夫を長官として進められ、天平六年（七三四）には有位の官人に位階に応じた宅地を難波京に班給している。これは直木孝次郎教授も書かれているように、宮殿ばかりでなく難波京全体が、いよいよ宮都としての体裁を整えてきた証と考えられる。この聖武朝に再建された難波宮を、今日、「後期難波宮」と称している。

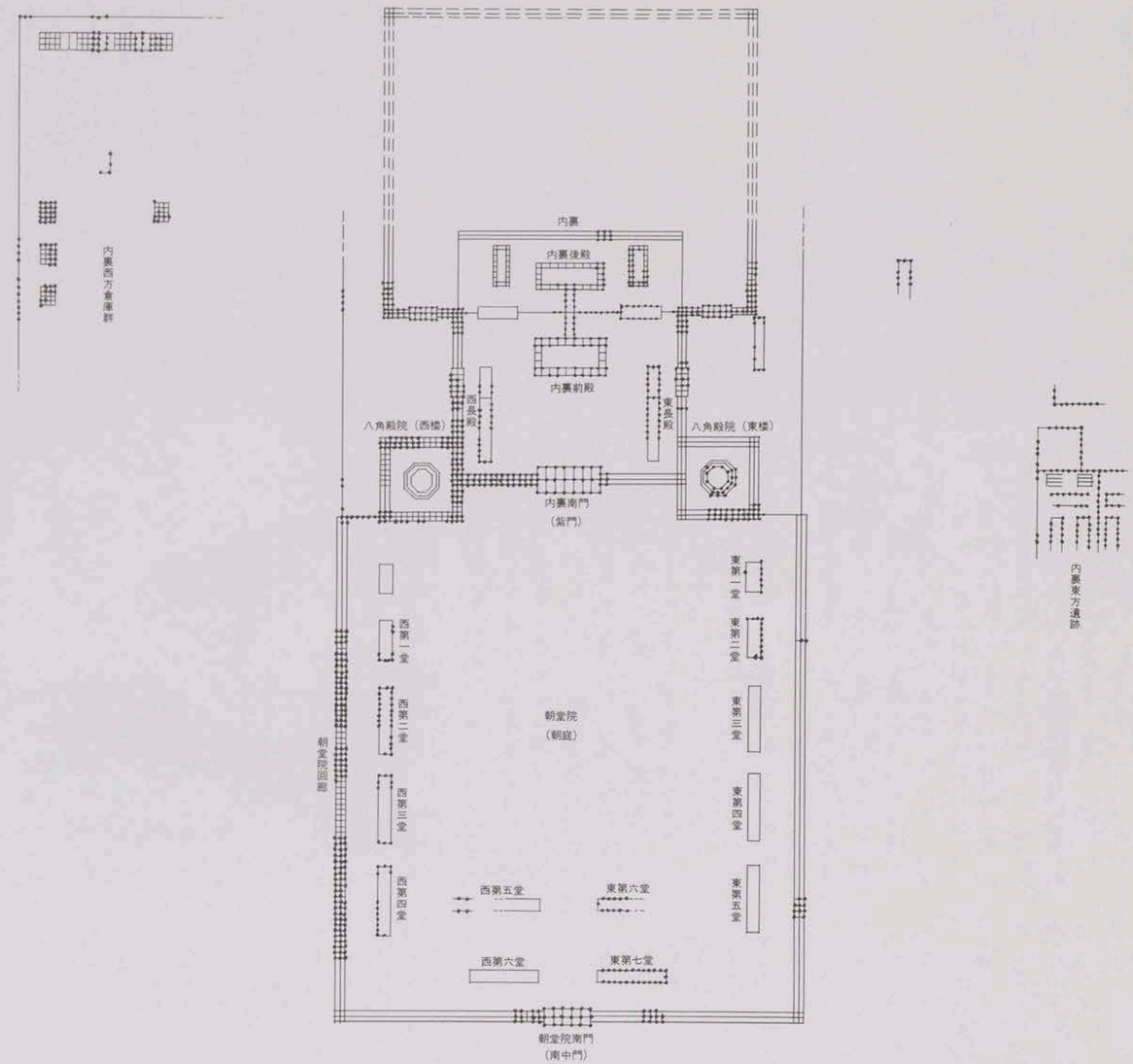
聖武天皇は、計九回も難波宮に行幸し、早くから難波遷都の意志があったといわれている。しかし、この時代はしばしば飢饉に見舞われ、また天平九年（七三七）には全国に疫病が流行し、王権の後ろ盾であった藤原家の兄弟がことごとく犠牲になるという突発事が起きた。さらに天平一二年（七四〇）の太宰小弐藤原広嗣の乱の発生などにより、難波宮遷都に至るまでにはかなりの紆余曲折があった。その経緯は、直木孝次郎教授の別稿に詳しい。

天平一六年（七四四）の正月、天皇は恭仁宮の朝

## 後期難波宮遺構配置図




## 前期難波宮遺構配置図



堂に百官を集め、「恭仁・難波の二京何れを定めて都とゐさん。各その志を言へ」と訊ねている。そして、直後に難波宮に行幸し、事実上、遷都の意志を固めたものと思われる。実際の難波宮遷都の勅宣は、左大臣橘諸兄によって行なわれたが、その直前に天皇はまた紫香楽宮に行幸するなど、あわただしい遷都であった。

**ウォーターフロント・難波の繁栄と終焉**

中央政権の混乱とは別に、難波の地はその間も急速に都市整備が進んでいる。たとえば『日本『霊異』記』は、天才的な建設技術者としても有名な僧の行基が、田信長が「およそ大坂は日本一の境地なり」と看破したように、あらゆる情報文化のインターフェイス都市・難波という前身があったからでもある。

## 三、後期難波宮の復元

**復元の概要**

◎全体の構成

聖武朝の後期難波宮は、孝徳朝の前期難波宮と同じ上町台地の北端部に、中軸線を共有する形で造営されたことが判明している。北から、内裏、大極殿院、朝堂院、朝集堂院が並んでおり、内裏部分は前期難波宮とは異なり、内裏回廊に囲まれて独立している。全体の構成や規模は、同時代の平城宮（第二次）との類似が指摘されているが、朝堂院の建物は平城宮が二堂であるのに対し、難波宮は八堂となっている。主要建物が中軸線上に南北に並び、全体が左右対称に配置されている点は、前期難波宮を始め藤原宮、平城宮などと同様である。

◎建物について

建物の基準尺は、前期難波宮とは異なり、天平尺（一尺＝二九八ミリメートル）が採用されている。主要建物の建築様式は、前期難波宮がすべて掘立柱形式であったのに対し、後期難波宮では内裏の殿舎は掘立柱、それ以外は礎石建物である。

①主要建物

〈内裏〉

天皇の居住区である内裏は、方六〇二尺（一七九・三メートル）の敷地規模を持ち、内裏正殿、内裏前殿があったことが判明している。

内裏正殿は、柱間が九間（二六・八メートル）×四間（一一・九メートル）で、建築様式は単層高床式（床高八尺）入母屋屋根に四面庇を持つ建物と推定した。また内裏前殿は、九間×二間（五・九六メートル）の単層高床式切妻屋根とした。この前殿は、平城宮や平安宮にはみられない難波宮独自の建物であり、その性格が注目されている。

正殿と前殿は、いずれも掘立柱の建築で、屋根は桧皮葺で棟瓦をのせていた。内裏の殿舎には通常は瓦を用いないが、難波宮では遺構の柱穴から蓮華文、唐草文及び重圏文軒丸瓦が出土していることから、ここでも採用した。

また内裏の北東隅には、井戸を配した。これは平城宮の内裏に、同様の井戸があったことに基づいて復元したものである。

〈大極殿院〉

大極殿院は、国家的な大礼や外国使節の謁見などの重要な儀式の場である。東西二三二尺（一〇〇メートル）、南北二六二尺（七八メートル）の敷地の中央に、宮殿の中心的な建物である大極殿がある。大極殿とは、北極星（太極星）から名付けられたといわれ、儀式や謁見の際にはここに天皇の座が置かれる。そうした厳粛な場にふさわしい荘厳な建物である。またその北側には、回廊（後廊）と接する形で大極殿後殿があった。

難波宮の大極殿は、東西長一四〇尺（四一・七メートル）、南北長七二尺（二一・二メートル）の基壇の上に建つ礎石建物で、柱間九間×四間の単層寄棟屋根の建築であったと推定した。屋根は瓦葺で、棟の両端には鴟尾を設けた。実際に付近から鴟尾片が出土しており、その復元模型もあることから、そのまま採用して屋頂を飾った。

平城宮の大極殿（第二次）は、東西長四六メートル、南北長二四メートル、高さ三メートルの基壇の上に、重層の壮麗な建物が建っていたといわれる。これと比較すると、難波宮の大極殿規模が小さい感もあるが、副都的な扱いであったものと判断した。

〈朝堂院〉

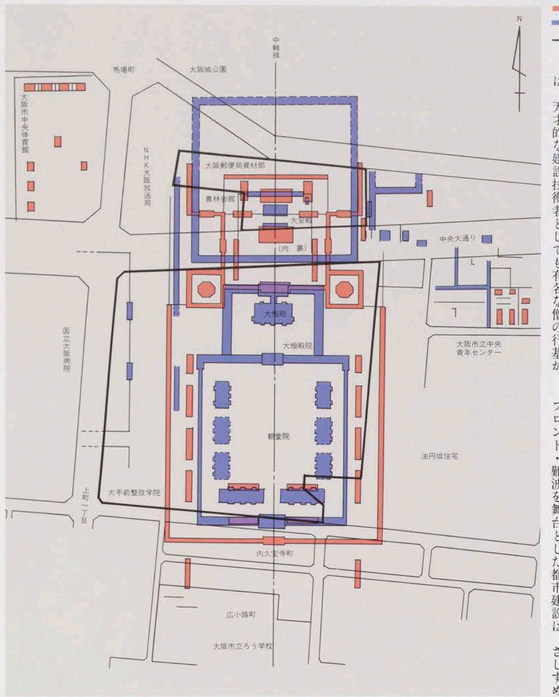
朝堂院は、儀式や祭祀を行なう三回時に、日常的な政務を執る場であり、また外国使節の接待のための舞楽や走り馬などの余興も行なわれた。百官が集い、外国からの賓客を招いた宴の折りなどは、華麗な天平絵巻が繰り広げられたであろう。その敷地規模は、東西五四二尺（一六二メートル）、南北六〇〇尺（一七九メートル）であり、東西合わせて八堂の建物が並んでいた。朝集堂が八堂というのは、藤原宮や平城宮の一二堂と比較すると少ないが、長岡宮とは同等である。

八堂はいずれも礎石建物で屋根は瓦葺だが、もっとも北側にある東西の第一堂は入母屋屋根、そのほかの建物は切妻屋根とした。東西の第一堂は、親王や左右大臣クラスの座る場であり、格式の高い建物であった。

難波宮関係の略年表

| 西暦 | 和暦(天皇年紀) | 天皇 | 事項 | |
|---|---|---|---|---|
| 5世紀 | | 応神 | 難波に行幸(大隅宮) | 5世紀建物群 |
| | | 仁徳 | 難波に都す(高津宮) | |
| 6世紀 | | 欽明 | 難波に行幸(祝津宮) | |
| | | | (このころ仏教伝来) | |
| | | 推古 | 外国使臣を難波に饗する(四天王寺・法隆寺建立) | 難波宮下層遺構(後期難波宮)検出 |
| 608 | 推古16 | | 遣隋使、難波より出発　唐客難波津、難波津に来る | 遺跡位置詳 |
| 645 | 大化元 | 孝徳 | (大化改新)都を難波に移す | |
| 652 | 白雉3 | | 難波長柄豊碕宮完成 | |
| 667 | 天智6 | 天智 | (大津宮遷都) | |
| 672 | (弘文元) | (弘文) | (壬申の乱) | |
| 673 | 天武元 | 天武 | (飛鳥浄御原宮遷都) | 前期難波宮 |
| 678 | 6 | | 摂津職の初見 | |
| 679 | 7 | | 難波に羅城を築く | |
| 684 | 12 | | 難波に都せんと欲す | |
| 686 | 朱鳥元 | | 大蔵省より出火、宮室全焼 | |
| 694 | 持統8 | 持統 | (藤原京遷都) | |
| 699 | 文武3 | 文武 | 難波宮に行幸 | |
| 706 | 慶雲3 | | 難波に行幸 | 中期難波宮 |
| 710 | 和銅3 | 元明 | (平城京遷都) | |
| 717 | 養老元 | 元正 | 難波宮に幸す | |
| 726 | 神亀3 | 聖武 | 藤原宇合を知造難波宮事とす | |
| 732 | 天平4 | | 宇合らに物を踊ラシ(工事一段落か) | |
| 734 | 6 | | 難波宮の宅地を班給す | |
| 744 | 16 | | 難波宮を皇都と定む | |
| 745 | 17 | | (平城京遷都) | 後期難波宮 |
| 756 | 天平勝宝8 | 孝謙 | 天皇、難波宮の東南新宮に御す | |
| 771 | 宝亀2 | 光仁 | 難波宮に行幸 | |
| 784 | 延暦3 | 桓武 | (長岡京遷都) | |
| 793 | 延暦12 | | この頃難波宮廃止 | |
| 794 | 延暦13 | 桓武 | (平安京遷都) | |






難波宮跡内裏・朝堂院復元略図

現代の東京ベイエリアにも似た活況を呈していたであろう。

一方、元明朝に造営された平城京は、水運によって難波と結ばれていた。そのため、難波津の重要性はさらに増し、遣唐使を始めとした海外交流の窓口となった鑑真の来朝もあった。

経済面では、難波に市が開かれていたことがいくつかの文献から知られるが、そればかりでなく右大臣藤原豊成や左大臣藤原魚名の別宅を始め、貴族や寺院の事務所や倉庫が数多く置かれたことも伝えられていて、その繁栄ぶりがうかがえる。

しかし、水に開かれ、水辺に栄えた難波の地にも、やがて衰退のときが訪れた。それもやはり、水と関係があった。天平宝字六年（七六二）、遣唐使船が難波の江口の浅瀬に乗り上げ座礁する事故が発生した。この事故に象徴されるように、大和川の氾濫に伴う土砂の堆積は、難波津の港湾機能を著しく低下させていた。それは同時に、難波京の都市としての価値を損なうものであった。

そして延暦三年（七八四）、水運上の理由もあって都が長岡京に遷されると、ついに難波京は廃止された。『万葉集』に、

「ありがよふ難波の宮は海近み漁童女らが乗れる船見ゆ」

と謳われた水辺の都・難波宮は、いつしか幻のごとく消え、忘れられていった。

けれども、藤原京の三代一六年、平城京の八代七〇余年という歴史と比較し、孝徳朝から一五〇年にわたって都として、あるいはそれに準ずる都市として栄え続けた難波は、今日のウォーターフロント開発の現点からみても、きわめて興味深い都市である。

やがて難波の地は数百年のち、石山本願寺が建ち、秀吉の計画都市が造られ、さらに江戸時代を代表する商都へと復活を遂げた。それは、くしくも織



〈朝集堂院〉

朝集堂院は儀式を行なう際の待機場所であり、東西に配置された朝集堂は衣服を整える場とされている。その敷地規模は明らかになっていないが、東西が朝堂院と同じ五四二尺（一六二メートル）、南北は半分の三〇〇尺（八九メートル）と想定した。また東西の朝集堂は、朝堂院に準ずる礎石建物で、切妻屋根の瓦葺とした。

②門、回廊、塀

難波宮の正門ともいえる朱雀門は、続く朝集堂院南門と同規模の柱間五間×二間の重層入母屋屋根であったものと考えた。また、朝堂院と朝集堂院との境に位置する朝堂院南門は楼門、大極殿院の入口にあたる大極殿閤門は、単層の切妻屋根とした。

〈回廊および築地塀〉

回廊は、中間仕切に連子格子窓を持つ複廊で、緩やかな軒反りを持ち、屋根は瓦葺。築地塀は、寄柱を用いた形式で、やはり瓦葺とした。

③細部の建築的特徴

〈屋根〉

後期難波宮の遺構からは、蓮華・唐草文系軒瓦や重圏文軒瓦が出土している。この中でも、特徴的といえるのは重圏文軒瓦で、これは後期難波宮の創建時に用いられ、のちの長岡宮にも再利用され、さらに平安宮にも再利用されている。

そのほか、主要建物以外の雑舎の屋根形式は桧皮葺あるいは板葺とした。

〈基壇〉

大極殿に代表される基壇は、束石を用いない古式の壇上積基壇で、石の材質は凝灰岩である。大極殿部分では、地覆石（高さ二九・五×幅五五・五×長さ一一八・〇センチメートル）も検出されている。また、基壇上の敷石については、四半敷きは八世紀後半に事例がないことから、ここでは布敷きと推定した。

なお、大極殿の基壇については、現在、「難波宮史跡公園」に復元されている。

〈柱〉

柱に使用された木材は、コウヤマキと桧である。コウヤマキについては、実際に遺構から二本が出土している。

丸柱の形状は、エンタシスではなく、直線形に加工したものを採用した。

〈その他〉

主要建物の軒部分は、二軒で地垂木が丸材、飛檐垂木が角材とした。また斗栱は、奈良時代初期の薬師寺東塔を、蟇股はもっと平城宮の朝集堂であった唐招提寺講堂及び法隆寺伝法堂を参考として形状を定めた。

地表面の化粧については、朝堂院の内庭を白砂敷き、そのほかの部分は直径五〇ミリメートル大の玉砂利敷きとした。また建物庇の下部には小石敷きの雨落溝を、さらに大極殿院と内裏の回廊には凝灰岩の側溝を設けた。

最後に、色彩については、木材部分は回廊を除く内裏の建物は白木、そのほかは丹塗りである。回廊や主要建物の連子格子は青丹に彩色した。また主要建物の壁は、漆喰白土仕上げとした。

**工程と工費**

今回、後期難波宮を復元するにあたり、古代工法と現代工法の両方から、工程と工費の算定を試みた。これは、古代における宮都建設のスケールを検討するとともに、まだ不明部分の多い難波宮の成立過程に、幾分かでもアプローチしてみたいと考えたからである。

後期難波宮の建設には、今回復元した範囲だけでも、常識的には通常の突貫工事で八年を要すると思われる。しかし、天皇家と藤原家が威勢をかけた宮都の建設であったことから、ここでは最短期間を五年半と設定し、試算を行なった。この年数は、神亀三年に藤原宇合が知造難波宮事に任命されてから、天平四年に工事に一区切りがついたと思われる時期までの期間と、ほぼ一致する。

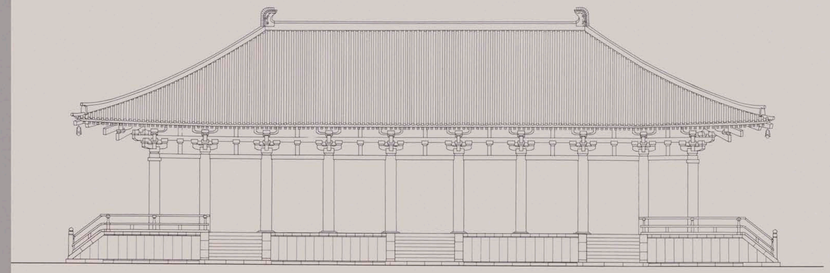
これはどの短期間で工事を進めるには、相当合理的な作業工程を組む必要がある。そこで、全体を「朱雀門」「大極殿院」「朝堂院」「内裏殿舎」の四グループに分けた。この分類は、実際の作業難易度によるもので、「朱雀門」「大極殿」などは難易度がもっとも高く、熟練の宮大工による突貫作業を想定した。ただし、短期のこれだけの職人を集めるのは、古代の王権であったからこそ可能といえる。

工期五年半のうち、前半の四年間は版築と大工仕事に費やされる。また実際に建設を行なうにあたっては、工事を始める前に約三年間の準備期間を必要とする。この間に、瓦を焼く登り窯の製作や、原石の切出し、原木の伐採、運搬、乾燥などを行なう。とくに原木の乾燥には約二年を要する。

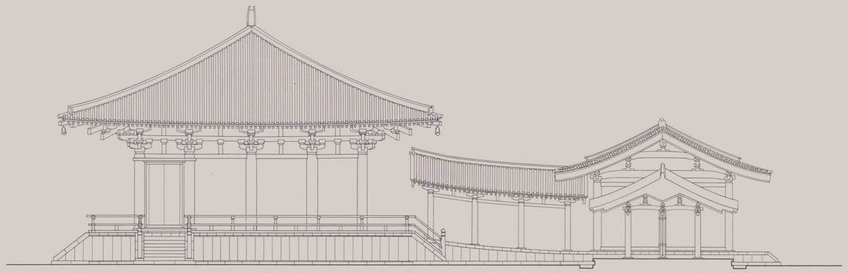
また、ここでいう古代工法とは、古代の道具（鉄製のヤリガンナ、刀子、手斧、錐など）を用いて、現代の職人が作業を行なうものである。それに対して現代工法は、機械力を導入して作業を進めた場合を想定した（33ページ参照）。

延べ作業人数は、古代工法ではかなりの違いがある。一方、工事費については、大半が大工仕事であることから、古代と現代の大きな差はなく、版築、石、瓦工事などに違いがみられる。なお、賃金はすべて現代換算とした（32ページ参照）。

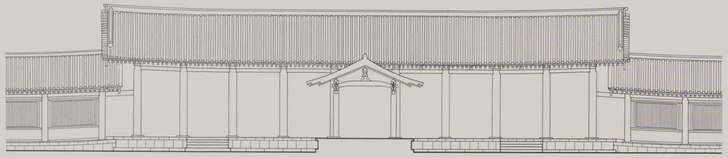
# 後期難波宮復元想定図



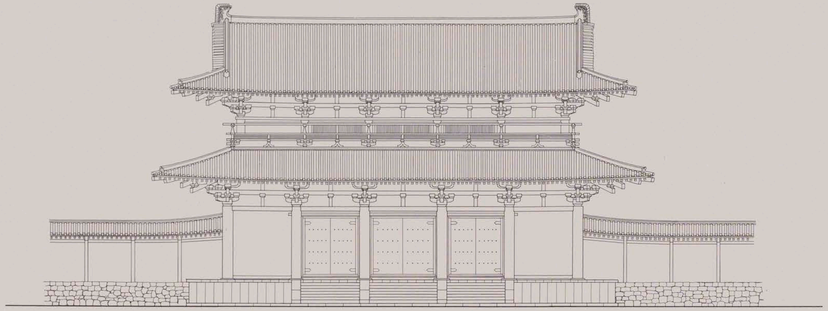
大極殿正面図



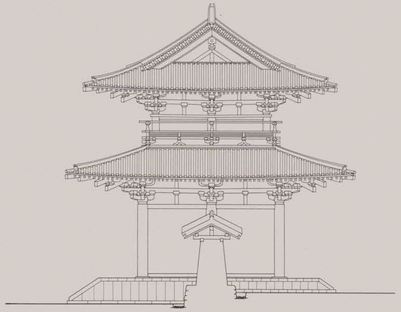
大極殿・大極殿後殿側面図



大極殿後殿立面図

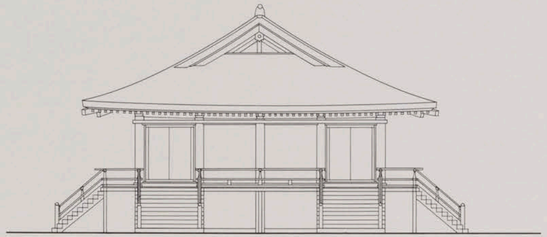


朱雀門・朝堂院南大門正面図

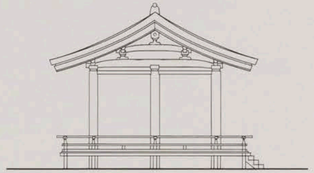


朱雀門・朝堂院南大門側面図

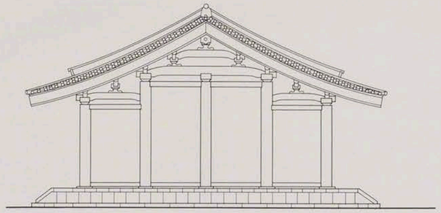
0 1 2 3 4 5 10m



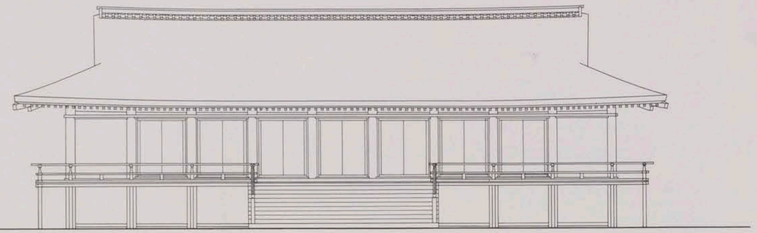
内裏正殿側面図



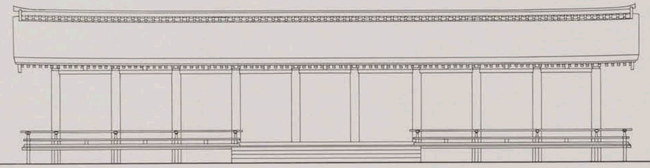
内裏前殿側面図



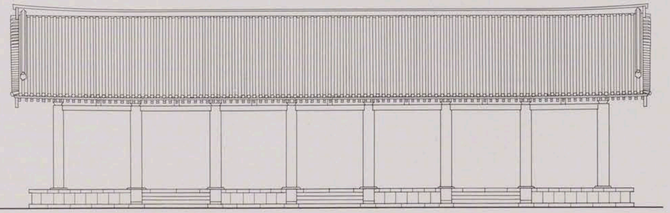
朝堂院東・西の第二・三堂側面図



内裏正殿正面図



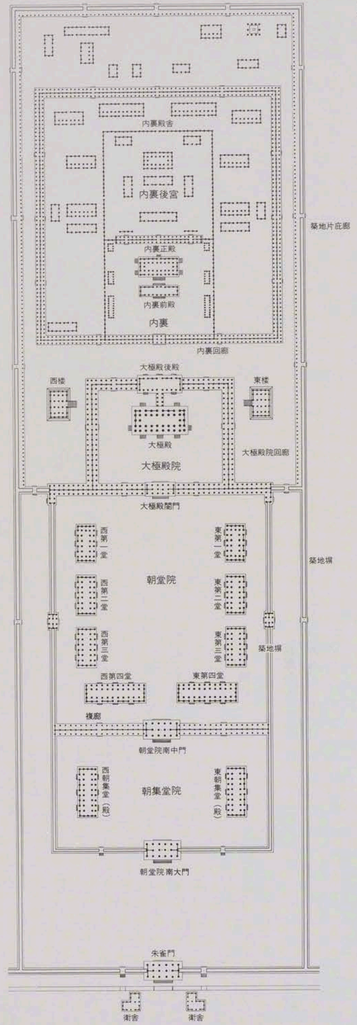
内裏前殿正面図



朝堂院東・西の第二・三堂正面図

0 1 2 3 4 5 10m

後期難波宮中心部復元配置図




0 50 100m

## 作業を終えて

大阪市中央区法円坂町の「難波宮史跡公園」に立つと、近くに超高層ビルが見え、目の前には阪神高速道路が走っている。そうした現代の都市環境の中で、古代の都の姿を想像することはなかなか難しい。しかし、目を閉じて一三〇〇年前の華やかな都を思い、遣唐使を送る港のざわめきに耳を澄ませてみる。すると反対に、変貌を続ける大阪にあって、その原点ともいえる難波宮の跡がよくぞ保存されてきた、という大きな驚きと感慨が沸いてくる。

昭和二九年の発掘開始以来、多くの方々の尽力によって調査と保存が行なわれてきた難波宮は、縄文から現代への歴史を綴る上町台地にあって、まさにそのシンボルである。そうした歴史的意義の高い難波宮の復元に携わったことは、われわれにとっても幸いであった。今回の復元を通して、読者の方々に、古代の首都・難波宮の存在とその意味の一端でも伝えられたら、と願っている。

なお、復元作業にあたり、九州芸術工科大学教授の澤村仁氏、財団法人大阪市文化財協会の中尾芳治課長と植木久氏には、多大なご協力を戴いた。また、工事費の算定にあたっては、株式会社安井杢工務店（木工事）、株式会社大佛（瓦工事）、中村石材工業株式会社（石工事）の各社にご尽力を戴いた。改めて御礼申し上げたい。

左頁の工程表は、年間実働288日として試算した。推定では当時、現場では、1日平均1400～1500人、ピーク時には2300人の人間が働いていた。この人数を確保するために、現場周辺に宿舎を造り、職人だけでなくその妻子も寝起きをともにして手伝いをしていたであろう。



### 工事作業人数[古代工法]

（単位：人）

| | 朱雀門グループ | 大極殿グループ | 大極殿 | 大極殿後殿 | 内裏正殿 | 内裏前殿 | 朝堂院グループ | 内裏殿舎グループ | 合計 | [現代工法] 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 木工(含手伝人) | 71,150 | 162,745 | 30,810 | 12,870 | 28,760 | 7,990 | 196,225 | 273,196 | 703,316 | 281,000 |
| 屋根野地工 | 3,583 | 6,795 | 1,120 | 487 | — | — | 10,743 | 17,078 | 38,199 | 27,472 |
| 左官工 | 1,625 | 3,204 | 403 | 216 | 473 | 250 | 7,530 | 13,651 | 26,010 | 26,010 |
| 建具工 | 2,704 | 10,700 | 608 | 352 | 860 | 640 | 3,623 | 16,792 | 33,819 | 13,400 |
| 塗装工 | 8,290 | 11,063 | 2,044 | 894 | 42 | 22 | 11,786 | 9,933 | 41,072 | 41,072 |
| 金物工 | 557 | 500 | 52 | 36 | 68 | 20 | 435 | 993 | 2,485 | 2,485 |
| 石工 | 7,210 | 9,902 | 5,670 | 508 | 175 | 85 | 32,395 | 5,650 | 55,157 | 11,032 |
| 版築工 | 49,300 | 130,363 | 33,500 | 5,746 | — | — | 123,929 | 51,441 | 355,033 | 27,295 |
| 瓦工 | 3,919 | 7,743 | 1,277 | 546 | 27 | 10 | 13,165 | 14,645 | 39,472 | 31,263 |
| 檜皮工 | — | 2,116 | — | — | 1,384 | 732 | 640 | 23,440 | 26,196 | 26,196 |
| 小計 | 148,338 | 345,131 | 75,484 | 21,655 | 31,789 | 9,749 | 400,471 | 426,819 | 1,320,759 | 487,225 |
| 敷砂利整地工 | | | | | | | | | 27,283 | 4,027 |
| 仮設工 | | | | | | | | | 57,024 | 57,024 |
| 管理者 | | | | | | | | | 42,424 | 42,424 |
| 合計 | | | | | | | | | 1,447,490 | 590,700 |

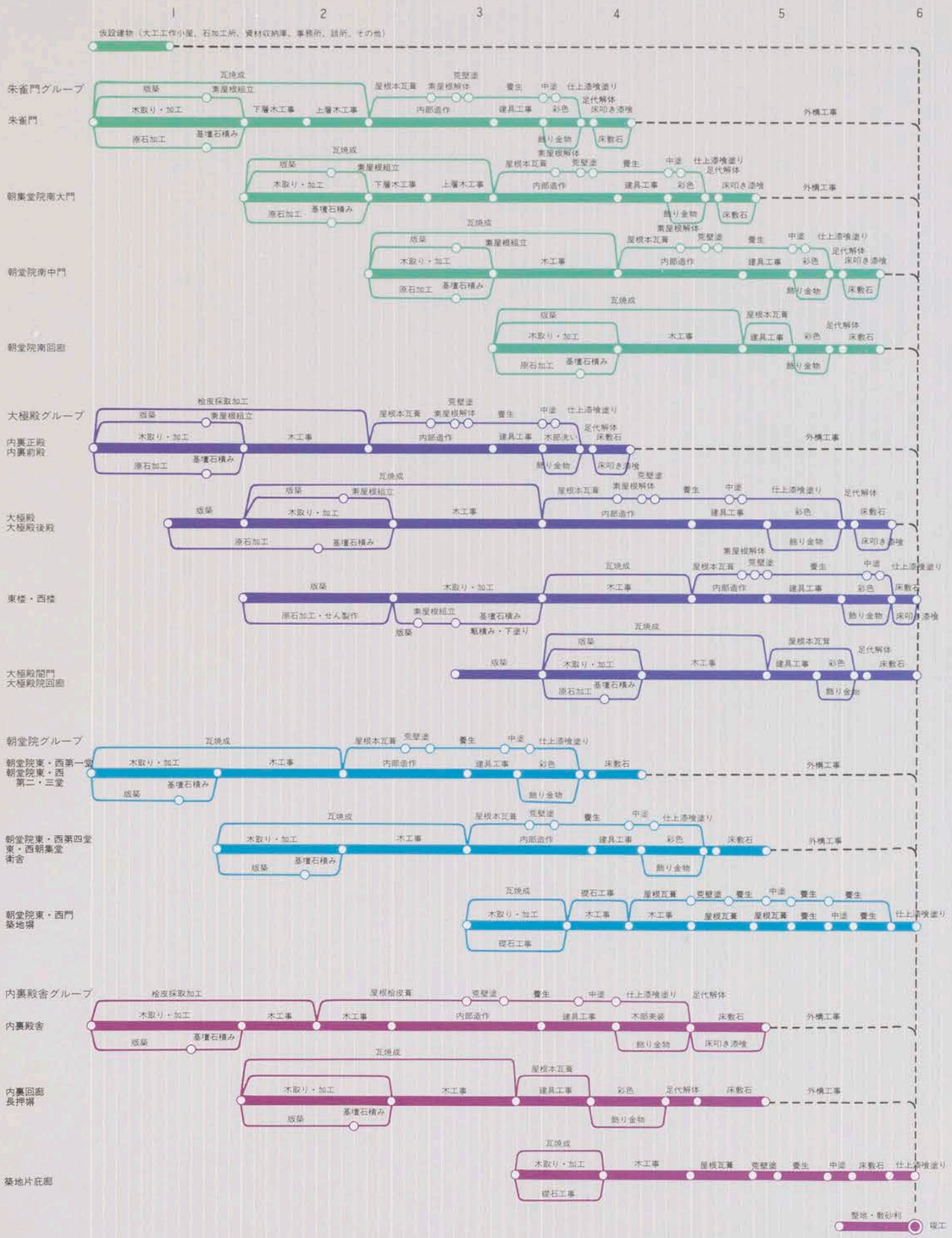
### 試算工事費[古代工法]

（単位：千円）

| | 朱雀門グループ | 大極殿グループ | 大極殿 | 大極殿後殿 | 内裏正殿 | 内裏前殿 | 朝堂院グループ | 内裏殿舎グループ | 合計 | [現代工法] 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 棟数 | 5 | 10 | 1 | 1 | 1 | 1 | 16 | 41 | 72 | 72 |
| 柱間面積合計(㎡) | 1,441.525 | 3,627.994 | 513.465 | 257.532 | 319.694 | 159.847 | 5,585.736 | 11,507.383 | 22,162.638 | 22,162.638 |
| 木工事 | 26,112,750 | 19,562,750 | 3,303,000 | 1,160,925 | 3,610,900 | 642,225 | 15,656,675 | 34,869,389 | 96,201,564 | 84,747,500 |
| 屋根野地工事 | 185,070 | 372,279 | 64,260 | 27,744 | — | — | 580,317 | 922,076 | 2,059,742 | 1,774,791 |
| 左官工事 | 96,370 | 192,760 | 24,200 | 12,970 | 28,500 | 15,100 | 451,744 | 820,726 | 1,561,600 | 1,561,600 |
| 建具工事 | 169,000 | 669,000 | 38,000 | 22,000 | 54,000 | 40,000 | 226,280 | 1,049,600 | 2,113,880 | 1,603,470 |
| 塗装工事 | 296,800 | 395,010 | 73,000 | 31,950 | 1,550 | 810 | 419,740 | 354,738 | 1,466,288 | 1,466,288 |
| 金物・飾り金物工事 | 89,400 | 97,190 | 14,500 | 7,070 | 10,420 | 3,300 | 100,450 | 192,480 | 479,520 | 343,760 |
| 石工事 | 415,090 | 570,160 | 326,430 | 29,235 | 10,125 | 4,950 | 1,864,970 | 325,335 | 3,175,555 | 1,711,160 |
| 版築工事 | 756,488 | 1,599,070 | 514,097 | 88,180 | — | — | 1,901,819 | 789,430 | 5,046,807 | 707,700 |
| 瓦工事 | 1,548,000 | 3,066,754 | 493,000 | 215,670 | 25,029 | 9,270 | 5,202,835 | 5,970,139 | 15,787,728 | 2,852,825 |
| 檜皮葺工事 | — | 82,004 | — | — | 45,038 | 36,966 | 35,520 | 1,300,032 | 1,417,556 | 1,417,556 |
| 合計 | 29,668,968 | 26,606,977 | 4,850,487 | 1,595,744 | 3,785,562 | 752,621 | 26,440,350 | 46,593,945 | 129,310,240 | 98,186,650 |

### 総建設工事費

（単位：千円）

| | 建築工事費 | 整地工事費（白砂玉砂利） | その他（含管理費） | 総計 |
|---|---|---|---|---|
| 古代工法 | 129,310,240 | 4,286,376 | 15,373,384 | 148,970,000 |
| 現代工法 | 98,186,650 | 1,390,000 | 12,479,350 | 112,056,000 |

### 後期難波宮古代工法による復元工程表